

2024年(令和6年)ズワイガニ漁期前の資源状況

○漁期前の推定資源量(鳥取沖・隠岐北西沖・出雲沖)

松葉がに…前年並みで平年(直近3カ年平均)を下回る。

若松葉…前年、平年を上回る。

親がに(雌)…前年並みで平年を上回る。

1. 漁期前の資源状況の根拠となる情報

試験船「第一鳥取丸」による調査結果 9月30日～10月24日にかけて、山陰沖の水深177m～438mの海域の合計28調査点で着底トロール網による漁期前調査を行いました(図1)。調査海域内における漁獲対象となるズワイガニの推定資源量(単位=万個体)は表1のようになりました。

表1 調査海域におけるズワイガニの推定資源量(単位=万個体)

区分	2021年	2022年	2023年	2024年	前年比	平年 2021-23平均	平年比
松葉がに(甲幅10.5cm以上)	47.0	22.2	24.9	28.2	113%	31.4	90%
若松葉(甲幅10.5cm以上)	172.9	194.2	167.8	266.0	158%	178.3	149%
親がに(くろこ)	128.6	104.4	282.9	281.3	99%	171.9	164%

※くろこ：漁獲対象となる茶黒色や黒紫色をした卵を持ったメスガニ

松葉がに：2024年漁期の漁期前の推定資源量は出雲沖、鳥取沖で減少、隠岐北西で大幅に増加したことから全体では前年比113%、平年比90%となりました。今漁期も松葉がにの資源状況は低位な状況が続いており、水揚げは「前漁期並みで低調」になると予想されまず(表1、図2左)。漁獲サイズについては、甲幅10.5～12cmの小～中型個体(17万個体)が甲幅12cm以上の大型個体(11万個体)より多い結果となり、近年は大型中心の水揚げが続いていましたが、今漁期は小型個体中心の水揚げに変わっていくことが予想されます(図4)。

若松葉：出雲沖、隠岐北西でやや増加し、前年比158%、平年比149%となりました(表1、図2中央)。資源状況に回復基調が見られ、2020年漁期から漁期の短縮、1航海当たりの水揚げ枚数を大幅に減らす等の資源管理強化を継続している効果が見られます。

一方で、資源状況が低位な状況が続いている松葉がにの資源の維持、回復を目的として、今漁期(2025年2月)は、さらに1航海当たりの水揚げ枚数の制限を強化(1000枚から700枚)することにしており、今漁期の水揚げは「やや減少する」と予想されます。漁獲サイズについては甲幅10.5～12cmの小～中型個体(212万個体)が甲幅12cm以上の大型個体(54万個体)より多く、小～中型主体の水揚げとなることが予想されます(図4)。

親がに：隠岐北西で前年より減少したものの(前年結果は隠岐北西の調査地点1点で大量入網があり過大な結果となっていた恐れあり)、出雲沖で大幅に増加し、推定資源量は前年比99%、平年比164%となりました(表1、図2右)。

親がにも資源管理強化のため、1航海当たりの水揚げ枚数を制限する取組を2020年漁期から強化しており、今漁期も取組を継続することから、今漁期の親がにの水揚げは「前年並みになる」と予想されます。漁獲サイズについては、甲幅7～8cmの小型個体の割合が85%、甲幅8cm以上の大型個体の割合が15%の結果となっており、小型個体中心の水揚げとなることが予想されます。

2. 参考情報

- (1) 鳥取県の沖合底びき漁業による漁獲量の推移：本県のズワイガニ漁獲量は 2004 年に 1,587 トンまで増加したが、その後は減少～横ばいで推移しています（図 5）。2023 年漁期の漁獲量は松葉がに 189 トン、若松葉 27 トン、親がに 276 トン、合計 491 トンで、前年（534 トン）及び過去 3 年平均（611 トン）を下回りました。
- (2) （国研）水産研究・教育機構 水産資源研究所（以下、水産資源研究所）の調査結果（調査月：5-6 月）：日本海 A 海域（富山県以西）における 2024 年漁期当初のズワイガニ資源量について、ミズガニ（若松葉）、メスガニ（親がに）は前年を上回り、カタガニ（松葉がに）は前年並みで 120 mm 以上の大型のカタガニの資源量は少ないと推定しています（図 6）。
- (3) 大型クラゲ：漁具被害等が生じるほどの大量入網はありませんでした。

3. 今後の資源状況

水産資源研究所による資源評価調査（5-6 月）では、日本海 A 海域（富山県以西）における 2024 年のズワイガニ資源量は、ミズガニ、メスガニの資源量が増加し、資源が回復傾向にあることが分かっています（図 6）。一方で、小型の若齢がにの加入が少なくなっている状況も分かってきました。

回復基調にあるミズガニを獲り控えれば 2025 年漁期以降にはカタガニとなって漁獲されるようになります。低迷しているカタガニ資源が回復するように、今漁期もミズガニの過度な漁獲を控え、ミズガニ、小型の若齢がにの混獲が多い海域では操業を控えて漁場を移すなどの取組みがより一層重要になると考えられます。

ホームページ 本報告は水産試験場ホームページに掲載しており、トップページの「調査研究」からアクセスできます。

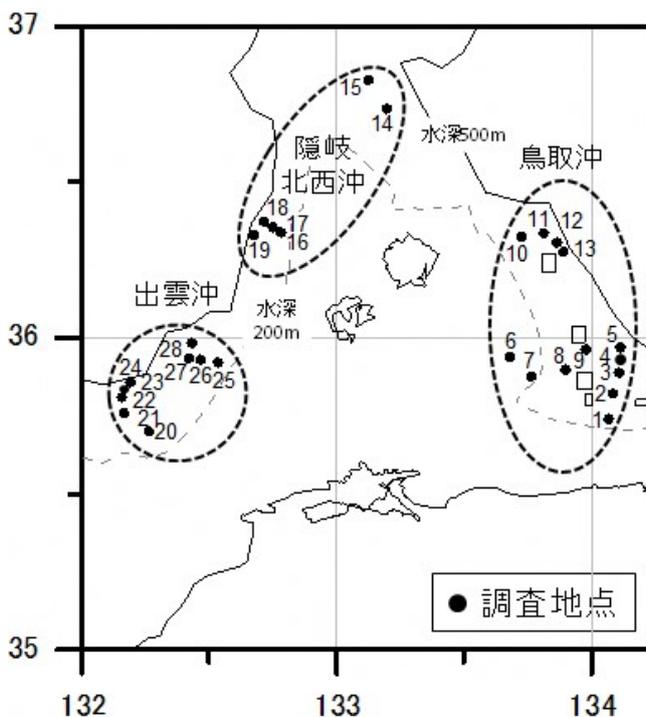


図 1 試験操業位置

その他

2015 年漁期から松葉がにのうち、大きさ・品質・型とも最上級の松葉がにをトップブランド「特選とっとり松葉がに五輝星」として販売を開始しています。

（五輝星の基準）

- 大きさ 甲幅 13.5cm 以上
- 形状 脚が全てそろっているもの
- 重さ 1.2kg 以上
- 色合い 鮮やかな色合い
- 身入り 身が詰まっていること

2023 年漁期は約 35.4 万枚水揚げされた松葉がにの中から、220 枚（平均 6.8 万円/枚、最高額 280 万円/枚）が五輝星に選定されました。本調査結果から大型の松葉がに（甲幅 13.5cm 以上）の資源量は前年より少ない（前年比 51.2%）結果となったことから、五輝星の希少価値はより高くなることが予想されます。

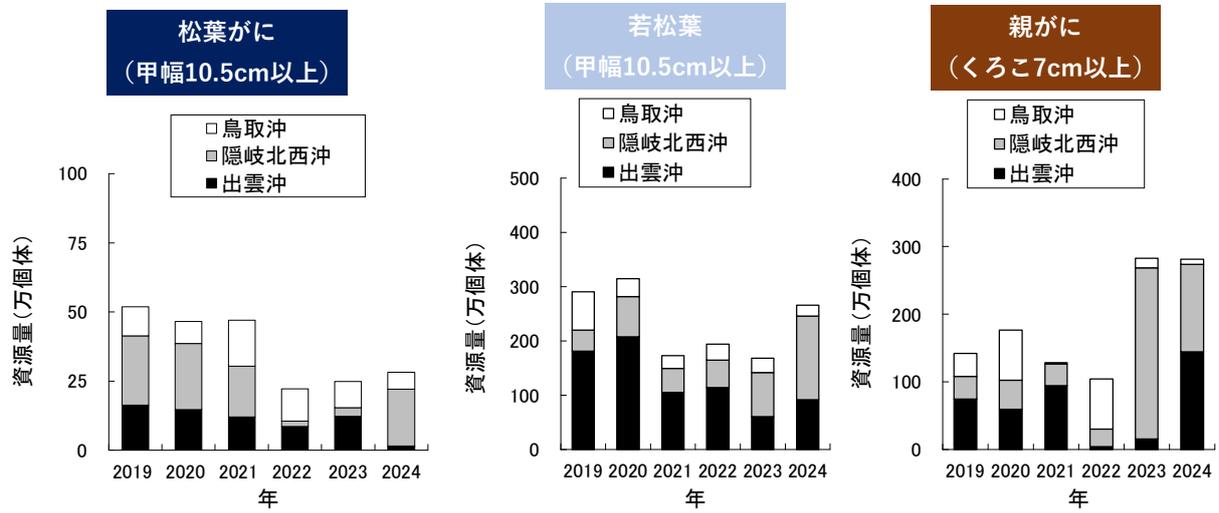


図2 年別海域別の資源個体数 (2019-2024年)

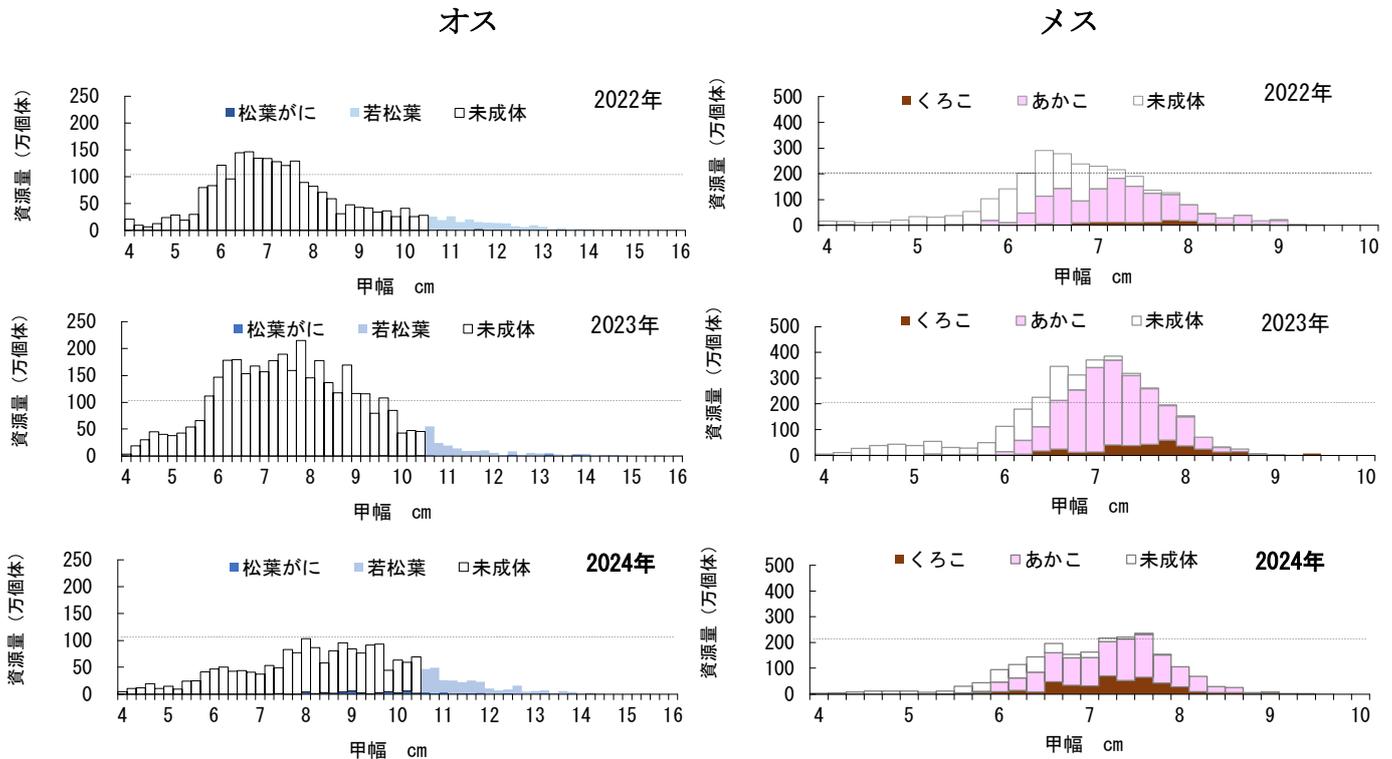


図3 調査海域全域におけるズワイガニ甲幅組成の推移 (2022-2024年)

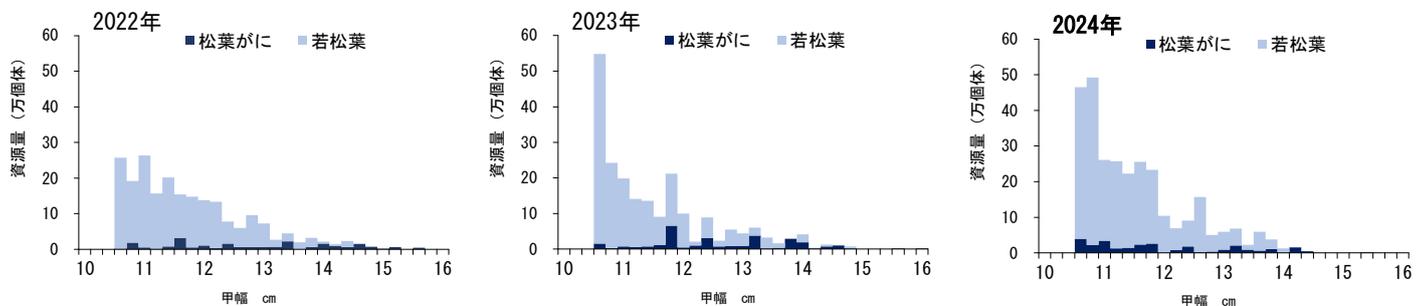


図4 調査海域全域における漁獲対象サイズ (甲幅 10.5cm 以上) の雄ズワイガニの甲幅組成の比較 (2022~2024年)

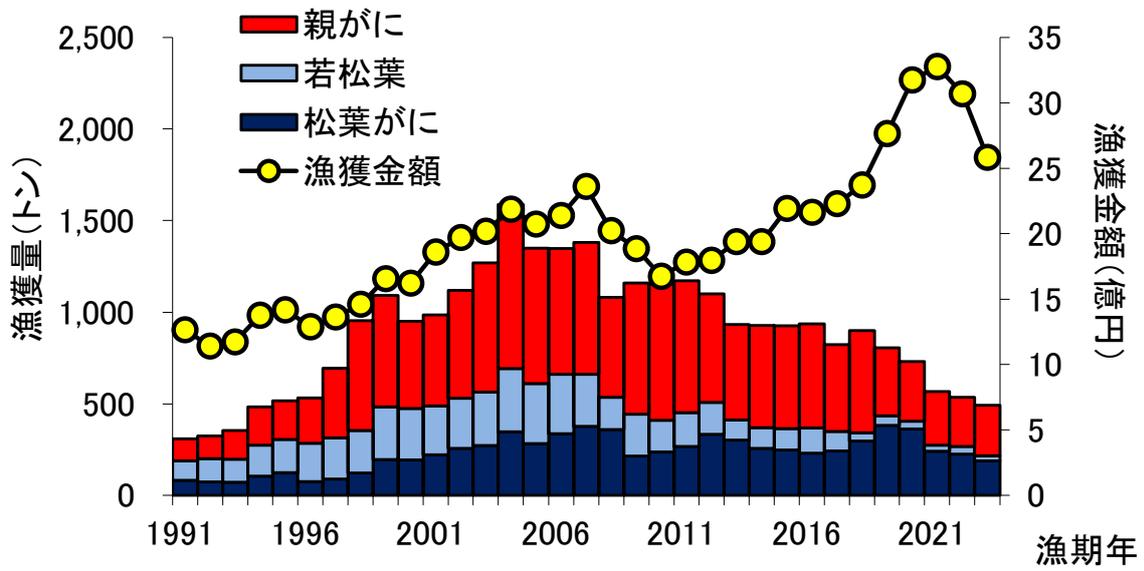


図5 鳥取県におけるズワイガニの漁獲量（漁期年：11月6日～翌年3月20日）

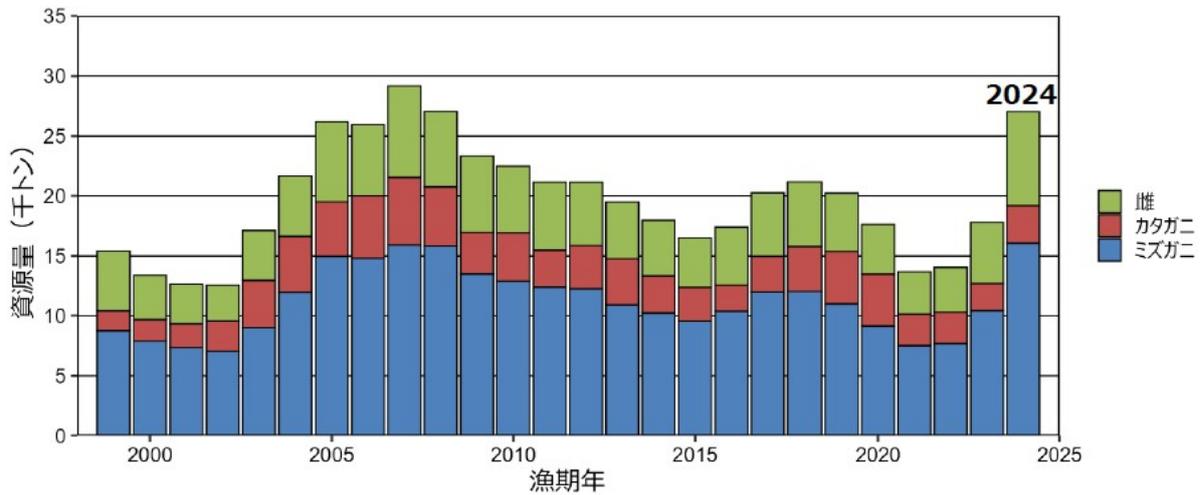


図6 日本海A海域（富山県以西）におけるズワイガニの推定資源量
（水産研究・教育機構 水産資源研究センター 底魚資源部 作成資料）